ワークショップ参加者の現状から考える「これからの博物館」についての一考察

結 creation/ 大阪市立自然史博物館　外来研究員　**北村 美香**
高槻市立自然博物館　あくあぴあ芥川　教育普及担当　**池田 裕介**

1．はじめに

近年博物館を取り巻く環境は大きく変化し、慢性的な財政難と人材不足が大きな課題となっている。社会的にも経済不振等で不安定な状況が続く中、博物館の社会的役割も検討せざるを得ない。このように厳しい状況下ではあるが、正しい知識や情報、新たな体験を得ることができる場として、博物館に対する期待値は高い。博物館に求められる役割は多様化、さらには高度化し、改正博物館法では文化観光推進の一翼を担うことも求められている。しかし、多くを期待されてはいるものの社会のニーズに合わせきれていない状況であることは否めない。今後博物館が社会においての存在意義を示していくには、博物館活動を通じて社会的課題へ取り組み、地域の活力の向上に寄与することが必要となってくる。

より多くの人に博物館を利用してもらうためには、利用者について知る必要がある。これまでにも利用者のニーズの把握するために、展示室内での利用者に対して行動観察とインタビュー調査の実施や、アンケートなどで今後の運営などへの意見を伺う機会を設けてきた。だが、どれも調査をおこなうための予算と人員が必要な場合となり、体力のない中小規模館では本格的な利用者調査はハードルが高くなってしまっている。

そこで、利用者調査用に新たにデータを取るのではなく、既存の事業などで収集しているデータを活用し、分析することで利用者分析と事業計画立案に寄与できるものがあるのではないかと考えるに至った。利用者調査の必要性は感じているものの、着手までには至らなかった中小規模館でも無理のない範囲で取り組めることはあるはずである。

本研究では、高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）（以下、あくあぴあ）を対象とし、年間を通じて定期開催されている「子どもワークショップ」事業で収集しているデータを基に分析することとした。高槻市は市の半分を山地が占めており、京都・大阪の都市部に近いが自然豊かな地域として、宅地開発も進み若い世代を中心に人口が増加している地域である。あくあぴあは高槻市の中部に立地し、周辺の緑地公園利用と合わせて週末には近隣の市町から家族連れが訪れている。高槻市では唯一の自然系博物館として職員 13 名で運営しているが、常勤職員は 2 名のみの小規模博物館である。来年度で開館 30 周年を迎えるが、これまでに企画展会場または講演会後にアンケートを実施はしているものの、データの分析や活用はされていない。

このような中小規模館は、全国に多くあるのではないだろうか。厳しい現状の中ではあるが現状で手元にあるデータや資源を活用し、課題解決の糸口とすることで改善へとつなげ、今後どのように社会にどのように貢献していけるのかについて考える。

2．研究計画

あくあぴあでは、現在以下３点が課題となっている。

① 利用者層の低年齢化が進んでいるのか

② ワークショップのメインターゲットが現状と合致しているのか

③ 企画展や事業のローテーション周期をどのようにするか

これらの課題について館内で指摘はされているものの、大きな問題が起こったわけでもなく、根拠となる客観的な数値がないこともあり後回しにされてきた。また、現状の調査などを進めたくても、人員的にも予算的にも余力がないため着手できない状況が続いている。これまでのアンケートデータも検討したが、項目のばらつきや実施時期が一定ではないことなどもあり対象からは除外した。

今回対象とした「子どもワークショップ」事業は2009年に指定管理を受託した際より実施し、現在のあくあぴあの教育普及事業の中心を担ってきた。毎月１回ペースで土日の２日間開催され、年間約４本のプログラムを提供している。これまでに36種のプログラムを企画・実施し、18,000人以上が参加してきた。

写真１　子どもワークショップ実施風景

写真２　ワークショップ受付風景

参加者の定員を定めていることや保険の関係で、毎回受付時に参加者の名前と年齢を記録している。途中、記載時に個人情報が見えにくくすることや、実施中のメモを取れるようにしたこと、付き添いの大人についての記入欄増設などを理由に受付用紙に改良があったものの、取

得する情報に利用者に関する継続的なデータであった。本来利用者研究用に収集しているデータではないが、既存のものからでも課題解決の糸口が見えるのではないかと仮説を立て採用することとした。

あくあびあ芥川　子どもワークショップ参加者名簿

年　月　日（　）	プログラム名：

番号	なまえ	とし	番号	なまえ	とし
1		（　）さい	13		（　）さい
2		（　）さい	14		（　）さい
3		（　）さい	15		（　）さい
4		（　）さい	16		（　）さい
5		（　）さい	17		（　）さい
6		（　）さい	18		（　）さい
7		（　）さい	19		（　）さい
8		（　）さい	20		（　）さい
9		（　）さい	21		（　）さい
10		（　）さい	22		（　）さい
11		（　）さい	23		（　）さい
12		（　）さい	24		（　）さい

付き添い　大人　　人
子ども　　人

付き添い　大人　　人
子ども　　人

改善前

あくあびあ芥川　子どもワークショップ参加者名簿

年　月　日（　） 天気（　）	プログラム名：

番号	なまえ	とし	見学	memo
1		（　）さい	大　小	
2		（　）さい	大　小	
3		（　）さい	大　小	
4		（　）さい	大　小	
5		（　）さい	大　小	
6		（　）さい	大　小	
7		（　）さい	大　小	
8		（　）さい	大　小	
9		（　）さい	大　小	
10		（　）さい	大　小	
11		（　）さい	大　小	
12		（　）さい	大　小	
13		（　）さい	大　小	
14		（　）さい	大　小	
15		（　）さい	大　小	
16		（　）さい	大　小	
17		（　）さい	大　小	
18		（　）さい	大　小	

改善後

図１　受付名簿

2020 年 3 月から 2021 年 2 月の間は、新型コロナウィルス感染拡大の影響で事業を休止せざるを得なかったためデータは抜けている。また、2021 年 3 月以降に再開した後も、感染予防を余儀なくされたため、実施スタイルをできるだけ密集しないように組み直し、実施時間も短縮するなど変更しており、コロナ以前と連続したデータとして取り扱うことは難しいため、今回の分析には 2021 年 3 月以降の再開後のデータを使用することとした。

３．実施結果

１）参加者の年齢から

コロナ前より、利用者の年齢層が低年齢化してきているのではないかと感じてはいたものの、調査等により客観的なデータとしては取れていない状況だった。日常の展示室での状況から、未就学児と保護者というグループを頻繁に見かけるようになっていたが、具体的な年齢層などは調べられていなかった。そこでワークショップ参加時に受付で聞いている年齢データを活用し、コロナ以前とコロナ後に分けて分析した。

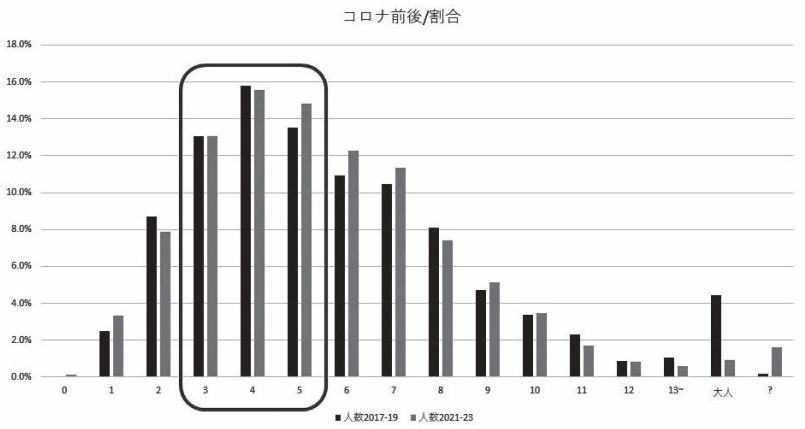

図２　月別の参加者年齢の状況分析

ワークショップの開催は月１回２日間のため、月別の人数を割合で示したところ、最も多かった年齢は４歳、次いで５歳、３歳の結果となった。ワークショップ参加者は未就学児が多く、小学校への就学を迎えると減少傾向にあった。３歳や幼稚園就学前の小さな子どもの参加については、受付時に記録している同じグループかどうかのメモを合わせると、単独の参加より４歳以上のきょうだいと一緒に来館し、参加しているケースが多いことが分かった。参加についての事前予約は取らず、当日各開催時間の10分前から参加者の受付をする形式をとっており、あくまでワークショップ参加者の傾向ではあるが、館の利用者の現状と全く同じとは言い切れないものの関連はしていると考えられる。

２）参加プログラムから

次に、ワークショップのテーマ別で参加者の割合を見ると、大きな差異は見られなかった。あくあぴあでワークショップを開催している場所は、近隣を流れる芥川の生き物について紹介しているフロアーで、水槽などが設置されている場所でおこなうことが大半である。そのため、魚や水をテーマにしたものが多くなっている。実施スタイルは、お話をメインに聞くものと、作品作りの割合を多めに取っているものなどさまざまで、できるだけ幅広いパターンで実施できるように意識するようにはしている。

大きな違いなどを見ることはできなかったが、ワークショップのタイトルからどのようなことが体験できるかが分かりやすい「おさかなスタンプ」は１～３歳児の参加者が若干であるが増加し、昆虫採集をおこなう機会が多い夏時期に開催した「むしのはね」は４～６歳児の参加が増加していた。

開催プログラムごと／年令別割合

全体	24%	42%	25%	6%	3%	53%	47%
プログラム名	1-3 歳	4-6 歳	7-9 歳	10-12 歳	中学生～	参加者	見学者
どうぶつの足	27%	41%	22%	8%	2%	55%	45%
おさかなステンシル	24%	41%	29%	4%	1%	52%	48%
どんぐりいろいろ	25%	41%	25%	6%	2%	53%	47%
おさかなスタンプ	33%	43%	25%	0%	0%	51%	49%
むしのはね	15%	56%	23%	6%	0%	52%	48%
ぐるぐるマーブル 水のもよう	21%	41%	19%	8%	11%	53%	47%
うなぎのみち どんなみち	26%	40%	24%	5%	4%	56%	44%
コイのたべもの コイのくち	26%	38%	24%	8%	4%	56%	44%

図３　プログラムごとの年齢割合

３）テーマや開催時期から

教育普及事業の年間計画は、当該年度に開催される企画展や他の事業との関係を考慮しながらローテーション周期をどのようにするか考えていくのは当然である。ワークショップも同様で、企画展等の関連事業として開催時期やテーマを決めて、内容についても考えているがすべてを新規で立案できる訳ではない。以前実施したものをリバイバルし、実施していることも多い。計画立案の際、前年度の実施テーマについては考慮してバランスは見ていたつもりではいたが、急遽予定を変更せざるを得なくなった場合なども含めて改めて見ると重なっているものが意外と多いことが分かった。

４．考察

既存のデータを３つの視点から見直した結果､参加年齢層のメインが４～６歳だったことは、利用者層を客観的に見ることができたため、これまで肌感覚で感じていたことへの確認ができた。６歳以降に参加が減少していくのは、小学校就学をきっかけに時間的な制約が出る、行動範囲が広がるなどであくあぴあの利用機会も減少していることが考えられる。リピーターになりやすい年齢もこの３年間が想定できるため、事業計画などでは３年をひとつの周期として立

案する必要があると分かった。

また、参加者の年齢が下がるほど、安全管理や作業工程などについて想定することが増える。そのためにも、ワークショップを企画する際は設定するテーマへの理解はもちろんであるが、それ以上に参加者の発達段階についての理解や周りの大人との関係性が大切になってくる。昨年度半ばより、参加する子どもたちに向けたプログラム構成だけでなく、周囲の大人のかかわり方を意識することの必要性についてスタッフ間で議論し、企画時には大人もプログラムにかかわってもらうような構成へと方針変更をした。データの分析はこれからであるが、実践者が現場の状況から感じた点を改善したことで、参加者間のコミュニケーションが充実してきたのではないかと感じている。年齢が小さい子どもたちは、保護者が側にいることで安心感を得られ、保護者も参加者となることで子どもたちの学びをサポートしてくれている。同じ時間を過ごし、経験をすることでワークショップ終了後にも参加による学びが長く継続できる環境づくりに繋がると考えている。

5．今後の展望

多世代、他分野の方がかかわる際は、時間がかかってもお互いに共通認識をしっかり持つことが普段以上に大切である。今回はワークショップを通じて利用者について考える機会となったが、館全体の利用者についても共通することが多いと推測できる。諸課題により利用者調査はハードルが高いものと感じていたが、できることから始めるきっかけとなった。今後は既存のデータを活用しての分析を進めると同時に、ワークショップ参加者に対して一歩踏み込んだ調査を実施し、利用者のニーズにより応えられる博物館運営を目指していきたい。

博物館の知を社会の役に立てていくためには、日頃からのたゆみない努力が欠かせない。自然や文化との出会いやきっかけづくりのために、博物館ができることはどのようなことか。あくあぴあの活動を通じてこれからも考えていきたい。

本研究は、研究課題番号 20K01134「実施者の経験を起点とした博物館でのワークショップ評価指標と手法開発」の一環として実施したものである。